

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007～2010

課題番号：19203001

研究課題名（和文）

裁判員制度の人々の受容と望ましい制度運用について—裁判員制度は成功するか？—

研究課題名（英文） How is the lay judge system accepted by the Japanese and how should it be operated?

研究代表者

松村 良之（MATSUMURA YOSHIYUKI）

千葉大学・大学院人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：80091502

研究代表者の専門分野：法社会学・法心理学

科研費の分科・細目：3401

キーワード：刑事司法、法意識、裁判員裁判、弁護士

1. 研究計画の概要

(1)裁判員制度が社会に浸透していくプロセスを明らかにする。具体的には、裁判員制度導入により、法や法システムに対する人々の態度や行動がどう変わるかについて、全国の一般人を対象に裁判員制度導入前（既に終了）と導入後の2回の質問票調査によって変化を明らかにする。

(2)弁護士を対象とした質問票調査を行い、裁判員裁判について評価する。この調査についても、裁判員制度導入前（既に終了）と導入後の2回の質問票調査によって明らかにする。

(3)裁判員裁判における①模範的な評議の技法、②スタンダードな主張・立証技法、③裁判員に法律用語を理解させるコミュニケーション技法の3つを、実証的根拠に基づいて作成する。

2. 研究の進捗状況

(1)一般人を対象とする調査については、サンプル数は1800、調査方法は留め置き法で、実査は2008年2月から3月にかけて行われた。有効回答数は1160であり、回収率は64.4%である。基本的な知見としては、人々は、裁判員制度が民主主義の原則に則している、裁判がわかりやすく常識に沿うようになることは高く評価しているが、その質（真実発見）については若干懐疑的であるというものである。

(2)弁護士を対象とする調査では、調査対象弁護士として、大規模会として東京3会（そこ

からはランダムサンプル）、中規模会として京都弁護士会（悉皆）、小規模会として、函館、旭川、釧路各弁護士会（悉皆）を選んだ。東京3会からは、1500のサンプルをランダムに抽出した。実査は郵送法で、2009年4月から5月に行われ、回収率は回収率は48.1%、37.4%、58.5%であった。主な知見としては、弁護士が、一般人に近い意見を表明する設問と、一般人とは著しく異なる意見を表明する設問があり、また弁護士会による違いも大きかった。

(3)裁判員裁判実験班は、裁判員の評決に影響を与える諸要因を言語学や心理学の知見を援用しながら特定することに主眼をおいて研究を行った。日弁連や地方弁護士会より提供してもらった日本各地で実施されている法曹三者合同模擬裁判における評議の会話を文字化したものを蓄積することによってコーパスを作成し、コーパス言語学、語用論、説得研究、集団意思決定論といった分野の知見を利用しながら、裁判参加者の言語使用の特徴を質的・量的に検討・抽出し、そこから裁判員と裁判官の判断要因、意識、思考体系の差異なども検討した。これにより、裁判官と裁判員の間には、使用言語域、思考体系、参加態度に差異があることが明らかになった。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進んでいる

一般人調査の第1波はおわり、平成22年度に第2波を予定している。その準備もかなりの程度進んでいる。弁護士調査は、調査を終わり、現在集計段階で、平成22年度には

学会報告、論文化を予定している。裁判員裁判実験は最終段階であり、平成 22 年度には研究のとりまとめに入る。

従って、①の評価も可能かもしれないが、第 2 波一般人調査を残していることから、②と判断した。

4. 今後の研究の推進方策

(1)第 2 波一般人調査をどこおりになく行うことが、平成 22 年度の最大の課題である。

(2)裁判員裁判実験は研究のとりまとめに全力を注ぐ。

(3)社会調査班は、第 2 波一般人調査を終えた後、第 1 波、第 2 波の前後研究および弁護士調査の結果を統合分析する。

(4)最後に、研究全体の統合を行う。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

①松村良之、人々の裁判員制度と刑事司法への態度——その評価を中心にして——、法社会学、72 巻、70-87 頁、2010 年、査読あり

②太田勝造、裁判員裁判の実証的研究：要因計画による制度運用への示唆、法社会学、72 巻、88-116 頁、2010 年、査読あり

③木下麻奈子、人々の裁判員裁判への態度—裁判員になることを規定する要因の構造—、法社会学、72 巻、117-134 頁、2010 年、査読あり

④松村良之、木下麻奈子、太田勝造、山田裕子、裁判員制度と刑事司法に対する人々の意識、北大法学論集 59(4):2302-2228、2008 年

[学会発表] (計 8 件)

①堀田秀吾、藤田政博、裁判員評議とコミュニケーション、ワークショップ報告(司法過程におけるコミュニケーション：分析の有用性とその課題)、法と心理学会第 10 回大会、2009 年 10 月 24 日、國學院大學渋谷キャンパス